

三学期、ある日の保育から

上坂元 絵里

一月始め、羽子板・羽根・お手玉をカゴに入れて保育室に置いてあった。隣の組の廊下でフリーの先生と年長の子が羽子板をしているのを見て、A子が私とやりたいと言ってくる。四月生まれのA子は、かなり器用で三回位は続く。S夫とY夫が保育室の扉越しにやりたそうに見ていたので声

をかけて誘う。S夫もまた、こつを掴むのが早く真剣な表情である。私も思わず楽しくなってしまふほどだった。Y夫は、こういうふうにやりたいというイメージははっきりしているものの、いざやってみると、「あれ、頭で考えるのと実際にやるのとは違うぞ」と感じ。O夫とK夫も誘う

と、O夫「どっちでもいいよ」と答える。こういう時に素直にやりたいと言えないのが、いかにもO夫らしい。しかし始めてみると、予想以上に上手で本人も楽しくなってくる。一方のK夫は、慎重過ぎてなかなかうまくいかない。

私の方も、相手が打ちやすいように打とうと相当必死になる。それでも不覚にも空振りを連発、子どもたちはそれもおもしろがる。どの子も保育者とやることで少しでも続くことがおもしろく、隣の組のR夫まで加わって五対一で向き合うことになってしまう。ちよつと自信を持ったS夫、O夫はどんどん積極的に私に羽根を打ち返して行く。Y夫はにこにこしながら、控えめに待っている。K夫は見物に回ってしまい、せっかく最初に始めたA子は、いなくなってしまう。保育者中心のやりとりが、ずっと続くものもどうかと思ひ、二人ずつの組になるように働きかけてそこを離れ

る。しばらくして様子を見ると、A子が戻って友だちに打ち方を教えていて良かったと思つたものの、やはり子ども同志ではあまり長くは続かなかつた。

その後、今度はお手玉を手にとつて遊んでいる。少したつと、S夫が二つの玉でできた得意げに言いに来る。私はその様子を見て、一つのことで自信を持つと次のことへの挑戦する気持ちが出てくるのかなと感じ、また、普段は泣き虫でなかなか立ち直れないS夫の力のある別の面を見た思いがした。その横で、K夫が自分もできると必死でやってみせる。先程の羽子板のときの自信のない印象があつたので、今度はできて良かったと思う。

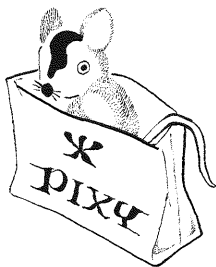
こうした場面では、できる、できないがはつきりと見えるし、友だちと比較する視点も生まれやすい。私は、いっしょに羽子板をしながら「○○

ちゃん、すごい！ 三回も続いたね」「あつ、惜しい」などと感嘆の言葉を発していた。真剣に取り組む充実感や、できるようになる喜びを共に味わいたいと思ったからである。だが、こうした保育者の反応は、評価的な要素も含んでいる。私の中には、こうした言葉をかけたことがよかつたのだろうかという迷いが残った。

「そんな事を考えていて、二学期のある日の場面を思い出した。おべんとうを食べながら、S夫が「僕は（プールで）ゴーグルをつけてるけど、Hくんはまだつけてないんだよ」と話しかけてきた。私は「H夫のほうが体格もいいし、何でも出来るように思っていたけど意外。小さい頃からスイミングスクールに通っていて、こういうランクづけをどう思っているのかな？」と、ちよつと心に引っかけた。さらに、その数日後にH夫がS夫に話しかけているのを見かけた。「あのね、ほ

くもね〇〇に合格したんだよ」と。それを聞いてS夫は「本当！ やったね！」と応え、ふたりで手を取り合って喜んでいたので。少し出来過ぎかなとも思うが、私はこの光景を見て考えさせられた。小さい頃から競争心を植え付けるような場にも子どもを置けば、早くから劣等感や嫉妬など好ましくない感情を持つことにつながるのではと思っていたけれども、周囲の大人が、その子なりの進歩や努力を見取り、やさしい気持ちでかわれば、子どもたちはこういうふうに関心する心を自然に持てるようになるのかしらと。

お手玉に飽きたH夫たちは、ボンボンと投げることを始めた。私はそれを見て、的投げのような



ゲームを思いつき、大きな紙を取り出してアイデアを投げかけた。子どもたちは、いくつか書いてみたものの、それで遊ぶことはせず、紙を裏返すとH夫が中心になってすごろくを書き始めた。私はそれを見て四歳児にすごろくは難しいのでは？

長続きしないのでは？ と内心思う。H夫、S夫、F夫、K夫は額を寄せ合うようにして、マスを書いたり色を塗ったりしている。私は厚紙でさ

うだったので、ほっとする。遊び方を見ていると「一周走る」に止まると、保育室を自分がひとまわり走って戻るといったアイデアが盛り込まれていて感心させられる。Y夫などケラケラと笑いながら、遠目にもとても楽しそうにやっている。フリーの先生もちようど通りがかって「おもしろいですね」と感心して見て行く。私としては、予想を越えて遊びが具体的に実現し、子ども同士やり取りがあって、よく遊んで良かったと感じていた。

おべんとうをはさんで、H夫、K夫が早速続きを始める。それぞれの駒が必要なのはと、とっさに思いついたアイデアでフィルムケースに色をつけたらと伝える。F夫、K夫、B夫、Y夫、H夫の五人。B夫は手が汚れてうまく塗れないというので、私が手伝ってきれいに塗る。ところが、そのおかげで一歩出遅れてしまい入りそびれる。しかし、少したつて見ると、なんとか加われたよ

帰りの支度の時間、H夫がさいころを持って帰りたいと言う。H夫だけに作ったものではないからと、ちよつと迷うが「今日、遊んだすごろくが楽しかったのかな？」と思い、「明日、忘れないで持ってきてね」と伝える。B夫がコートを着るのを手伝おうとすると、手に先程の駒を持っていて、私にこれいらないと不満げな表情で渡す。私

としては、何とか仲間に入れたのかと思っていたのと、ていねいに塗ってあげたものなのにといい思いで「じゃ、持って帰らないで引き出しに入れておいたら？」というが、首を振るのでそのまま預かる。隣に座ったH夫が「僕は、引き出しにしちまうてあるよ」と言うので、「また、明日遊べるものね」とこたえると、「でも、あのすごろくちつともおもしろくなかった」という。H夫は中心となつて遊んでいた印象だったので、これも意外に思う。

このすごろくのように、子どもたちのちよつとした動きにヒントを得て、保育者の方からこうしてみたらと働きかけることができたとき、保育者は、子どもが始めたことを一歩深めるかかわりを持つたと満足感を抱く。共通のイメージのある遊びを、幼稚園にある材料を使って子どもたちなりに再現して遊んでいるのを見ると嬉しく思う。こ

れは、私の正直な感じ方である。けれども、もっと大切な、そこにかかわった子どもたちのひとつひとつの場面での心持ちに思いを馳せるとき、その全てを保育者が理解することはとても難しい。それでも、すごろくの例では、たまたまお帰りのつぶやきを耳にして、少しだけ子どもの思いに気がつけた。「遊びの充実」と言いながら、「遊びの形」に気を取られ、ひとりひとりの子どもの思いを見落としがちな自分があると感じた小さなきごとである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)